

Princess Knight

姫騎士

エレナ

背徳に染まる
寝取られ母娘王女

新居佑
挿絵 / コウキョウ

試し読み版

18
未 満

二次元ドリームノベルズ

プロローグ	王女と女王。麗しき最強の母娘戦士	006
第一章	屈辱の淫紋。アナルレイプに悶える姫騎士	055
第二章	恋人の前で。触手鎧と産卵アクメ	094
第三章	最淫な悪夢。もう戻れない肉欲	133
第四章	熟女戦士陥落。未亡人女王、媚薬焦らし責め	174
第五章	堕ちる母娘騎士。明かされる本性	205
第六章	完全屈服宣言。牝欲に堕ちた王国	256
エピローグ	官能のウエディング。ポテ腹に咲く妖華	280

登場人物紹介

Characters



エレナ=ウィル=ラングラン

ラングラン王国の王女であり気高い姫騎士。ツンケンしながらも恋仲の少年ノアを大切に思っている。

ノア=ブルッケン

若き考古学者でエレナとはお互い好き合っている仲の少年。



オリヴィア=ナイ=ラングラン

ラングランを統べる女王であり、エレナの母。穏やかな雰囲気でも包容力もある女性だが、仇なす敵には容赦がない。

アイザック

不正で今の地位を築いたラングランの悪徳大臣。かねてよりエレナとオリヴィアには情欲の眼差しを向けている。

「おおつつ、美しい。いや、エロすぎると言った方がいいかな、エレナ？ 胸を弄られただけなのに……くつつ、あの強気な姫様の股がグシヨグシヨだ」

羞恥と屈辱に揺れるエレナの表情を見下す、アイザック。その丸まった顔を、レオタードを横にずらされ、隠すもののがなくなったエレナの秘部へと近づけてくる。

「くんくん……むふふうつつ。汗と淫らな牝の発情臭がブレンドされた、いい香りだ。くく、その様子だとまだあのガキとは経験していないようだな？ まあ当然か。あんな貧相な男に王女の処女を奪うなどという度胸があるはずもない」

「くつつ、ノアをバカにするなんて……。絶対に許さないわ、アイザック！ ノアはお前のように邪神の力に魂を売ってしまうような下品な男ではないわっ！」

「ふふふ、そんなにあの男のことが好きか？ だが覚えておけ。お前のご主人様は儂だ、エレナ。うゝむ、たまらん。お前のエロいマンコのせいで、ワシの逸物がもう我慢できなくなってしまうぞっ！」

アイザックは、豪華な衣服、その下をバツと脱ぎ放ち、自らの下半身を露わにする。

そこに現れたのはエレナが、いまだかつて見たことのない、勃起し発情した男根……それも破格のサイズを誇る巨大なペニスだった。

太さは、なんとエレナの二の腕ほどもあり、長さはおおよそ三十センチといったところ。

皮が根元まで剥けており、いきり立ったその男根には、浮きだつた血管がピクピクと、その熱い牡欲を顕示している。

亀頭部分は、陰莖よりもさらにブクンツと大きくなつており、中央に一本の切れ込みを持つ傘の形は、エレナにまるで魔界の生物との邂逅を想像させるほど、不気味なものだ。

先端からは、ドロリとした先走り汁がすでに滲みだしており、アイザックの突き出た脂肪腹の前で、ビクンビクンツと蠢く様は、吐き気を催したくなるグロテスクさだ。

「う、くううつ。そ、それが男のオ、オチンチン……っ!! くうつ、なんて汚らしいのかしら? そんな不浄なモノ、さつさと私の視界から消しなさい、アイザックっつ!」

（す、すごい大ききさだわ……。まるで前に見た馬のモノみたいじゃない。男の人つてみんなあんなに大きくなるの? ……っつ、ノア以外のオチンチンを私に見せるなんて……許せないわっ!）

母であるオリヴィアが、エレナの父だけを愛したように、勃起した剛直を目にするとしたら、恋するノアのものだけ。同時に、自分の恥ずかしい女芯を見せるのも、ノアが初めての相手であり、生涯最後の相手……。

そう思つて疑わなかつたエレナは、アイザックの逸物にひどい嫌悪感を抱く。今すぐ蹴りを入れてやりたいと思うが、身体はいまだ思うように動かない。

「ふふ、調教が進めば、僕のチンポを嫌でも好きになるわ。それでは、麗しの姫君の〃初めて〃をいただくとするか」

下半身裸のアイザックが、身動きがとれず、恥辱のM字開脚を強要されているエレナに迫る。

完全に勃起した肉棒から立ち上る、ムワツとした熱気が、露わになった女穴を刺激し、意図せずヒクヒクといやらしく震えてしまう。

肉体改造魔術を受けた身体は、憎い相手にレイプされようとしているのに、まるでそれを歓迎するかのようになり、熱く甘い痺れを、エレナの全身から脳にまで届かせる。

(くうっ、ごめんなさい……ノアっ。私、こんなやつに犯されよう……っ)

ラングランの姫として、物心ついたときから、すべてを自分の意志で決め、実行してきた。

聖騎士と呼ばれるまでに弓術を極め、オリヴィアが推し進める世界平和の道も、ともに支え、引き継ぐと決めた。

筋の通らない甘言をはね除け、苦しいときでも、常に正義を貫いてきた。

だが、今はどうすることもできない。

こんな大嫌いな奸臣の中年親父。その腐りきった牡欲に、思うがまま組み伏せられてし

まわざるをえない。

「そう、固くならないことだな。安心しろ。お前の処女はまだ後にとっておいてやる。儂がいただきたいのは……っ」

アイザックは、悔しさと恥ずかしさにフルフルと痙攣する恥丘を前に、肉棒の角度をグツとさらに下へ変え、エレナが思いもよらない……もう一つの女穴へと固くいきり立ったチンポを、不意打ち気味にねじ込んだ。

ズブズブウウウツツツ！ ミチミチイッツツツ！ ズニウウウウウ！

「あ、な……っつ！ そ、そこはちが……っつ!? くひ、んくううううっつ！」
完全に予想外の衝撃に、エレナが苦悶の表情を浮かべる。

美しい眉がハの字に下がるが、王女の気位の高さを必死に保つべく、声だけはなんとか押し殺す。

「ふははははっつ、悪かったなエレナ王女っ！ 儂はマンコも好きだが、お前のような生意気な娘は、まずアナルから調教すると決めているのだ。どうだ？ クソ穴をチンポで掻き回される感触は？」

ズブツツ！ ズブズブツツツ！ ゴリユゴリユウウツツ！

エレナのアナルに突きいれられた肉棒が、引き抜かれることなく、その場でグリグリと

グラインドを開始する。

まるで内臓を直接こねくりまわされているかのような感覚が、お尻の中で渦巻き弾ける。腕ほどもあるアイザツクの極太ペニスが無理やり押し込まれた、うら若きピンクの肉壁が、内側から破れんばかりにメリメリと歪な音を立てる。

そのたびに、身体が裂けるかのような重い痛みが全身を駆け抜ける。

「あつ、くふううつ！ こ、こんなものた……ただ痛いだけよつ！ 愚かな男、ふぐつ……ねつ。お、お尻の穴で……あうつ。感じる女がいるわけないじゃないつ！」

エレナは持ち前の精神力で、アナルから迸る強い痛みを耐えながら、覆いかぶさっている醜悪な大臣を睨み付ける。

「ふふつ、それはどうかな？ 王女といえど、所詮は女。女はケツでも感じる事ができる。牝豚に堕ちることができ。それを今からたつぷり教えてやるぞ！」

アイザツクは肉棒をアナルに埋めたまま、なにやら黒い粉末を袋から取り出し、エレナのお腹の上にバラリとまき散らす。

その粉は、ハイレグアーマーの上で、ジュウウツという音を立てながら、一瞬で蒸発してしまふ。だがその瞬間、

ビクツツ！ ビクビクウウツツ！

「んっ、あうっ！ くぁ……な、なに……いつ!? あ、は……ひううっ！」

突然、エレナの下半身に胸を刺激されたときのような甘い痺れが感じられた。と同時に苦悶でしかなかった菊門からの痛みが和らぎ、肉棒に無理やり拡張されるだけだった腸壁が、自分からウネウネと、アイザックの男根にいやらしく絡みつき始めたのだ。

先ほど粉をまかれた箇所――。

エレナのちょうど子宮がある部分の肌に、見るからに妖しげな紋様がボウツと現れる。よく見なければわからないほど、まだ色はかなり薄いのが、強い邪悪な妖気が漂っている。

「くくくっ、種は無事蒔けたようだな。エレナ王女、それは邪神が司る淫紋だ。これでお前の身体は徐々に変化し、やがてすべての感覚が性感と変わり、二十四時間発情し、快楽への欲求も強まっていく。まだ根付いたばかりだが、その効力は……ほれ？ しつかり尻穴で感じているだろう？」

ヌプウツツ！ ゴリュツツ、ゴリュゴリュウウツツ！

アイザックがニヤリと笑い、尻穴に突き入れられた肉棒を、わずかに出し入れし始める。「はっ、ううううっつ！ こんな……こと……っ。この、下種……めええ……ひうんっつ！」

先ほどまでは痛みでしかなかった、肉壁と男根の擦れ合う感触が、アイザックの言う通

り、今では明確な快感信号となって、脳に伝達されてしまう。

（な、なんなの……この感覚ううつつ!! あっ、くううっ。む、胸よりも……す、すごいっ。お尻の……ああうっ、お尻の穴なのに……あはううつつ!）

聖騎士として、強力なモンスターと対峙したときとはまるで違う、牝ゆえの本能の苦しみと快感に、エレナの清廉な心が困惑してしまう。

「淫紋はお前の身体と心が、快楽に屈していけばいくほど濃くなっていく。それが、はつきりと見えるほどに濃くなって、淫らな華を咲かせたとき、僕はお前たちが封印した邪神の力のすべてを獲得し、全世界の支配者となるのだっ! そおら、エレナあああつつっ!」

ギュボツツ! ドチュンツツツ! ズブブウウウツツ!

「だ、だれがそんなこと……っ。ふぐうつつ! んつつ、はあんっ!」

淫紋の効き目をエレナに刻み込むように、アイザックの太った身体が、エレナが体感したことのない男根の快楽ピストン運動を開始する。

ドチュンツツ! グリリイイツ!

「んっ、くふううつつ! あっ、あううつつ!」

ノア以外の男……アイザックになど死んでも聞かせたくない、自分でも聞いたことのない

い甘い牝の声が、自身の庭園に響いてしまう。

「ほれ、どうだ、エレナ？ 尻でもしつかり牝の快楽を感じることが出来るだろう？ はい、と素直に言ってみろ。将来のオナホール女王女よっ！」

ジブウウツツ！ ゴチュツツ！ ズチュンツツ！

見下すように言ったアイザックの腰が、より大きく引き上げられ、さらに一段深く強いピストンを、エレナのヒクつく菊穴にお見舞いしてくる。

「そんなこと……んあつっ！ あつ、くつ……ふおつ、ううううつっ！ あつ、んあつっ！ ひつ、くううつっ！」

（ふ、深いいいっ！ こんな、お尻の奥まで……あはうつ、おチンチンが入るなんて……っ。き、気持ち……んっつ、認めたくない……認めたくないのにいっ！）

淫紋を刻まれてから十数分が経った。

エレナが尻から感じる感覚は、すでに蕩けるように甘い女の快感だけになっていた。

唇を必死に閉じ、男を可能な限り睨み付けようとするが、まるでこちらの抵抗の意志を弄ぶかのように繰り出される、極太ペニスの突き込みによって、紫の瞳はエロティックに潤み、はあはあと熱い吐息が漏れ出てしまう。

ジワ……トロ……っつ。

「おほほ、エロエロに牝汁が湧いてきたわ。口ではまだ認めていないようだが……。お前のアソコからは、はつきりと濃い蜜が滲みだしておるぞ？　くははつつ、これが王族の淫乱汁かつ！」

「くうつつつ！」

自分の秘芯が、じんわりと濡れた牝の発情反応を示していること。それをアイザックに指摘されたことに、姫騎士たるエレナのプライドが大きく傷つけられる。

しかし淫紋によつて強制発情させられた身体は、自分の意志とは無関係にジユクジユクと愛蜜を滲ませて、ツーンとした淫猥な香りまで放ち始めている。

「い、違法行為で得た魔術でいい気にならないことねっ！　これは淫紋によるもの。私の心は絶対にお前なんか屈しないわ。牝奴隷になんて、なつてたまるものですかっ！　私が愛しているのは、快楽でもあなたでもないっ！　ノアだけよっつ！」

たまらない恥辱を突きつけられようと、凜とした王女の誇りを失わないエレナ。今までにも増して強い表情で、アイザックを睨み返す。

「そうかそうか。だがそこがいいぞ、エレナ。そんな強気なお前に惚れたのだ。美しく高い女ほど僕の欲望を満たす牝に相応しい。くくくつ、時間はたつぷりある。まずは一発、ケツ穴でイク悦びを教えてやろう！　決して忘れられないほどの快楽をくれてやるぞっ

っ！

グチョンツツ！ グチョンツツ！ ドチユドチユウツツ！

アイザツクの腰つきがさらに一層激しさを増す。体重百キロをゆうに超える肥満体が、贅肉とともにズンズンと腰を揺らし、高貴なエレナの尻穴の奥の奥まで、己が欲望の剛直を突き立てる。

「ひぐつつつ！ あふつつつ！ あつああつつ。くううんんつつつ！」

（ああつ、これすごつつ！ おチンチンがお腹を突き上げてくるつつ！ こんなやつに……アイザツクの汚いモノにお尻えぐ扶られると……はあんつつ！ おおおつつ。身体が……おかしく、されるううつつ！）

これまでの突き込みが遊戯に思えるほどの強烈なピストンに、エレナの全身の快感が急激に高まってくる。

両方の乳首が痛いほどきつく勃起し、ジンジンと切なく疼く。腰が意志を離れて何度も浮き上がり、快感の混ざった淫らな声を抑えられなくなっていく。

「うははつつ、姫様の上品なケツ穴もチンポに慣れてきたようだな。エレナよ、感じているだろう？ お前の尻肉が僕のチンポにねっとり絡みつく様をつつ！」

「ふああつ、くふううつつ！ そんなこと……あるわけ……つつ！ ひぐううつつ！ オ、

オチンチンんつつつ！ ……お尻いい、イイつつつ！」

思わず尻穴からの快楽に溺れてしまいそうになる心を、強いプライドで食い止めるエレナ。だがそんな姫騎士に、アイザックの加虐心がくすぐられる。

「違うだろう、エレナ！ チンポとケツ穴、それにマンコだつつ！ 今度からはそう言えつつ！ あの小僧がどうなつてもいいのか!? くくつ、牝豚に上品な言葉は必要ない。その気取った常識から淫らに変えてやらねばなあ」

性欲の高まりに合わせ、サディスティックな感情を爆発させるアイザック。

内臓を突き破らんばかりにズンツツツ！ と腰を打ち付け、エレナの矜持きやうじをも犯している。

「おふおおうつつ！ この……つつ。くうつ、わ、わかっているわ。チ……チンポ……つつ！ ケツ……王族のケツ穴にチンポ、思いつきりハマつてるのよおおつつつ！」

（く、悔しいいつつ！ でもノアが……。言わなくちゃ……。言いたくないのに……チンポ、ケツが気持ち……イイイツ）

王女として、想い人を持つ一人の乙女として、絶対に認めたくなかった不浄の穴での変態快楽。無理やり口に出させられた淫語に、ひどい羞恥とゾクリとした背徳の快感を覚えてしまう。

「はははっつ、聖騎士と言われる姫戦士がチンポと言うとはなっ！ そうだ、もっと感じさせてやるっつ！ さあ、イけエレナっつ！ 儂のチンポで、ケツでイクのだ！」

パンパンパンッッッ！ ズンズンッッ、ズチュズチュウウッッ！

エレナの丸々としたお尻に、アイザックの腰が激しく打ち付けられる。尻穴を高速で前後する肉棒が、ブクリつと大きく膨らみ、肥大化した雁首が、淫紋で快楽調教された尻壺の壁肉を、ズルルウウッッ！ と根こそぎ擦りあげていく。

「はあはあっつ、ああっつ！ ひんっ、あんんっつ！」

（ひくううっつ！ アイザックのチ、チンポすごおっつ！ だ、ダメ……っつ。な、なにかくるっつ！ すごいくるっつ！ ケツ穴、爆発するうううっつ！）

ピンクのレオタードを着込んだエレナの美体が、自分でも信じられないくらいにビクビクと淫靡いんぴに痙攣する。

負けたくない。恥ずかしいところを見せたくない。そう強く思っても、尻肉を容赦なく抉り抜く肉棒の快感は止まることを知らない。

ギチギチッッッ！ ジュクジュクウウッッ！

「あつ、はんっつ……く、うううっつ。あはっ、ああんっ！」

（あああつ、私なんて声を……こんなの私のせいじゃ……っ。こ、これが女の……っ）

「くく、いい声で啼く。尻の締め付けも……くうつ、上等だ。さあ、食らえエレナ！ 儂のザーメンをたっぷりとなあつつ！」

「や、やめつつつ！ やめなさいアイザックつつ！ やめてええええつつつ！」

エレナの乙女の本能が、悲しみと切なさに絶叫する。

しかしそんな声などお構いなしに、パアアアンツ！ という鋭い突き込みと同時に、膨れ上がった肉棒の先端から、大量の熱い男の白濁が、エレナの腸内に噴射される。

ドブドバアアアアツツツ！

「ひぎいいんつつつ！ ああんつつつ、あつつ、はあああああつつつ！」

尻穴から溢れんばかりの大量の牡汁を受けた瞬間、エレナの視界が真っ白に染まり、感じたこともない気持ちよさに、肉体だけでなく心まで、女の頂点へと無理やり昇り詰めさせられる。

（イク……あああつつ、私……こんな男に……お尻で……つ。ケツ穴でイってるつつ！と……止められないつ。またイ、イクウウウツツ！）

エレナのスレンダーな女体が、アナル絶頂を認めたかのように、ビクビクウウツツ！と大きく痙攣する。

今にも口から吐き出されそうな『イク』という卑猥な敗北言語を、無理やり胸の奥にま



で押し返すのがやつとであり、レオタードアーマーからのぞくムチムチした媚肉は、生まれたての子鹿のようにブルブルとエロティックに震えている。

「んあつつ、あああつつつ！ ま、またなにかクルわつつ?! ひうつつ、ああつつ……あつひいいつつつ！」

エレナの甲高い嬌声が響いた瞬間、エレナの股間部からブシユオオオツツ！ と猛烈な勢いで、半透明の熱い水しぶきが放たれる。

「ハハハツツ、これはこれは。エレナ王女は潮吹き体質だったようだなあ。これはうれしい限り。ベロ、ジュルウウツ。ふふふ、甘露甘露。生娘の牝汁は格別だな」

「し、潮……吹きですつて……ええつつ?! ああつつ、止ま……ダメエ。汁ううつ。牝汁吹いちや……んああつ、はあああんつつつ！」

（ああつつ、気持ちいいツツツ！ ケツ中出しザーメン、潮吹きいいつつ。悔しいつつ、悔しすぎるのに……あああんつつ、ノア……お母様……つ。私は負けないわ……つ。

こんな卑劣な……下種男なんか……ああつ……絶対にいいつつ！）

直腸に、アイザックの熱いザーメンの感触が流れ込んでくる。

全身の感覚が浮遊し、自分が自分でなくなつたかのように不思議で、なにより圧倒的に気持ちいい絶頂感に、エレナの背筋がビクビクつと震えあがる。

「いい攻撃よ、ノアつつ！ そのまま続けて……つつ！ え……つつ!？」

ダメージを受けたゴーレムのカウンターをノアから遠ざけようと、弓矢を構えたエレナだったが、岩の巨人は「ウオオオ……ン」という、弱々しい鳴き声とともに、力なく崩れ落ちてしまう。

だがゴーレムは、ただ活動を停止したわけではない。

ガラガラツツツ、ズザアアアアツツツ!

「う、うわつつ……あああつつつ!」

「な……つつ!？ くつ、しまった。ノア……つつ。ノアツツツ!」

エレナとノアの間で崩れ落ちたゴーレムは、その巨体を構成していた岩で、不自然なほどきれいに道を塞ぎ、エレナとノアを完全に分断してしまう。

「なんてこと……。ノア、返事をして。お願い。お願いよつつ!」

斬りかかったノアは、瓦解するゴーレムに巻き込まれてしまった。早く安否を確認したい。収まりつつある土煙の中、その募る思いが、エレナの声を強くする。

(ノア……あの位置なら無事のはず。でもやっぱりこのゴーレム変だわ。普通あの程度でやられるわけがないし……なによりこの崩れ方……。まるで私たちを意図的に……つつ!?)

心に引つかかる不安の出所を整理する間もなく、エレナの身体に……正確には、そのムチムチした女体がまとう、ピンク色のレオタードアーマーに異変が起こる。

「つつつ。くふうつつ。あひつつ！ な、なんなのこれつつ!? 鎧が……ひい、ううんんつつ！」

突然のことに、エレナはこれまで抑えてきた甘く、エロティックな喘ぎ声を、ダンジョンの通路に響かせてしまう。

ジュルジュルつつ。グチュグチュうつつ。

エレナに嬌声を発せさせた卑猥極まる水音の原因は、予想だにしない……自らのレオタードアーマーから発せられたものだった。

魅惑のボディラインをさらに強調するように、ピッチリと密着しているハイレグアーマー。その肌に触れる内側部分が、柔らかい当て布から、ジュルリツと卑猥な無数の触手へと、瞬く間に変貌へんぼうしたのだ。

「んくうつ、む……胸が……つつ。あ、ひいんつつ！」

男好きのするポインっ！ と突き出た乳房を守っていた胸当て部分が、今では気色悪い触手モンスターへと変化し、ポリウム感溢れるエレナの豊乳を、下側からムニユムニユツと、遠慮なく揉みこんでくる。

まったくの予想外の淫辱に、エレナは抵抗することさえ叶わず、淫紋で発情した若い女性に、触手がまとわりついてしまう。

（う、腕……腋までなんて……っ。ふ、太もも……っ。くうっ、気持ち悪い、のに……あふっっ、今身体触られると……おっ）

胸当てだけでなく、袖やニーソックスの内側までも、触手の群れに変貌している。まるで生きたドジョウやウナギを、レオタードの中に注ぎ込まれたかのような、ヌルヌルとネバネバが混ざり合った感覚に、強い嫌悪感が湧く。

もし体調が万全なら、不快ではあるが、まるで問題ないシチュエーションだ。

しかし、媚薬で感度を引き上げられ、淫紋で一日中発情している身体にとつて、白くきめ細やかな肌への直接タッチは、何ものにも勝る強力な責め苦となつて、姫騎士を悶えさせる。

「くふっっ、鎧が触手になんて……そんなこと……っ。あうっ、やつぱりこれは……んあああっ！」

ラングラン王国が誇る最上級防具を、こんな淫猥な姿に変える……。そんなことを思いつくのも、実行できるのも、憎いあの男しか思い浮かばない。

「くくく、ようやく気づいたか？ いい様だな、エレナ？」

不敵な声とともに、エレナの背後に、憎き大臣が光の粒子とともに現れる。

「ア、アイザック……っつ！ やっぱりお前がっ。くうっ、どうやってここに……っ!?」

「儂のコレクションには転移アイテムなど腐るほどある。それに、この一週間で随分魔力の使い方を覚えてな。この程度の距離なら、淫紋が刻まれた女の場所に空間転移することなど造作もない。ゴーレムを操り、トラップを仕掛けておくこともなあ」

触手鎧の愛撫に、乳首を固く勃起させ、立っているのもやっつという感じで両太ももをガクガクと震わせているエレナと、それをニヤニヤしながら見下すアイザック。

「相変わらず趣味の悪い……男、ねっ。ノアに手は出させないっ。絶対につ！」

こんなところに自分たちを誘導したのは、自分がノアを好んでいるということを利用して、目の前で彼をいたぶることで、自分を従順にさせようという魂胆……。

騎士であり、まだ初心な乙女であるエレナには、アイザックがそう考えているものだとしか思えなかった。

「なにを勘違いしている、エレナ？ お前が余計なことをしない限り、儂があんなひ弱なガキを傷つけたり、まして始末するはずがないだろう？ お前を気高い王女から、変態のマゾ牝豚に調教するための、最高の道具でしかない、あんなに使える小僧をなあっ！」

アイザックが指輪をはめた右手をかざすと、男の掌から不可視の邪悪な魔力が迸り、エ

レナを覆う触手鎧、その動きを一気に活性化させる。

「ジュルウオオツツ！ズルリユウウツツ！」

「ふあっつ！ あんっつ……なにこれっ。まさかまた媚薬ううっ!! 　そこ、くふううっ。おっぱいがっつ。太もおおつ。くああんっつ！」

すでに鎧部分の六割はウネウネとした触手へと変わり、股間周りや、薄手のニーソックス、腕の部分がわずかに残るばかりだ。

しかもネバネバした粘液が付着した場所から、先日の媚薬と同じように、身体の内側に猛烈な牝の疼きが広がっていく。淫紋の強制発情効果とあいまって、身体が快楽欲求の炎にまかれていく。

「ふふ、お前が発情で悶々としている間に、鎧に少し細工をさせてもらったぞ。そいつはお前の鎧に、僕のコレクションの凌辱用触手モンスターを合成させたものだ。聖騎士様を悶えさせるのに、最も適した道具だとは思わんか？」

そのグラマラスな女体を、触手が大量に分泌させる強力媚薬粘液でベトベトにされながら、撫でまわされるエレナ。

（あ、熱いっつ。まずいわ……。この媚薬……。前のより強い……。っつ。身体がもつと敏感になるっ。ひ、ひいううっつ。触手、これ……。ズルズルやめ……。なさいっつ）

性的な愛撫の経験など、アイザックくらいしかいないエレナが、手慣れたように女の弱点をついてくる触手の淫らなボディタッチに身悶える。

しかも盛りのついた触手たちは、あろうことか、エレナのまだ誰にも侵されたことのない初々しい蜜壺を、その媚薬でヌメついた触手で重点的に嬲り、舐め、擦りあげてくる。

ジュルジュルツツ、ゲジュウウウツツ！

「くおっつ、な……そこ……っつ!! んひいいいっつっつ！」

狭い通路に、エレナの甘い絶叫がこだまする。

これまで胸や足回りのみだった触手への変化が、ついにレオタードの最も淫猥な部分である股間にまで及んだのだ。

王女のデリケートゾーンを守る部位が、一瞬にして無数の触手へと変化する。

高度な頭脳などもたない触手たちは、本能の赴くままに、密着したエレナの陰部を刺激し始める。

ジュルズリユウウツ！ ズリズリイイツツ！

「あひっつ、くふううんっつ！」

媚薬がべつとりついた、ぬめついた触手で肉唇を撫で上げられると、すでに発情していた牝の花弁が、ムクムクと充血し、パツクリと左右に開ききる。

熟した果実のように膨らんだ陰唇の中央の穴から、トロリと濃い恥辱のラブジュースが、まるで触手に飲んでほしいかのように、ドブドブツと後から後から溢れ出してくる。

（くうんっつ！ 触手にオマンコ撫でられて……えっ。はあはあっ、熱くなつてきちゃう……っ。子宮が……。ケツ穴がっ。疼いちやうのおっつ！）

媚葉と淫紋によつて炙られた牝欲が、不気味な化け物相手にも、女の快楽を求めてしまう。エレナの牝の昂りたかぶに呼応するかのようには、股下の触手たちの動きが活発になっていく。ブクリと膨れた亀頭のような先端部を、濡れた秘唇に押し付け、グリグリと擦り始めたのだ。

「あふうっ、な……なんなのこの触手たち……っ?! う、嘘でしょっ。まさか……っ?!」
エレナが気づいたときにはもう遅かった。

発情した牝穴を前にして、牝本能に突き動かされるだけの化け物が、愛撫だけで済ませるはずはない。

ピンク色のハイレグアーマーが、卑劣な触手鎧へと変化してしまった瞬間から、エレナの純真な想いは、汚される運命にあった。

「さあて、じっくり味わえ、エレナ。処女を触手たちにぶち抜かれるその感覚。その快感をなあっつ！」

「ふ、ふざけない……あくうつ。動かない……つつ！ 剥がれないつつ！ ああつ、来るな……来ないでえええつつつ！」

(ノア、ごめんなさい……つつ。私の処女が……こんな……つつ)

ジュルルルツツ！ ズブウウウツツ！ ブチブチイイツツ！

「ふざいいつつ！ あふつつ、くううつつつ！」

蜜壺に、極太の触手が容赦なく突き込まれ、ズンズンツとりズミカルな抜き差しをし続ける。

処女喪失の悔しさを糧に堪えようと思つても、一瞬で牝の肉欲が子宮から燃え上がり、美しい女体すべてがいやらしくビクビクと跳ね躍る。

「あつ、くあああつつ。ひぎいうつつ。あつ、あああつつ。この……あううつつ！ ふつ、おとおんつつ！」

(そ、そんな……つつ。初めてなのに……つつ。こんな触手で私……感じて……くふううつつ！ こ……のおつ！ はひいんつつ！)

両手でどうにか引き剥がそうとするが、ヌメつく媚薬粘液にまみれた触手は、蝟の吸盤よりも強い粘着力で、獲物であるエレナの身体から離れない。

それどころか、股間の内側に生えたイソギンチャクのような触手で、勃起してしまつた

陰核をズリズリと擦られると、脳天にまで激しい快感の稲妻が迸り、軽い絶頂を味わわされてしまう。

「ふ、おとおつ。はあはあつ、んふううつ！ ああんつつ！」

完全に剥き出しになった胸を下からズリユリと撫でられるたびに、野太い嬌声が漏れ出て、背筋がビクンツと跳ね上がりそうになる。

王国随一の女騎士が、力なく地面に膝をつき、切なげに眉をひそめ、悔しそうに……そして気持ちよさそうに、唇の端から涎を垂らす。

（イ、イヒイイ……っ。こんな低俗モンスターなんか……犯されて……っ。あうつ、負け、ちゃあ……っ。オマンコ感じ……ひうらんっ！）

取り落としてしまった弓矢に、必死に手を伸ばそうとするが、鍛えられているとはいっても、少女一人の腕力では、どうやっても触手の力には敵わない。

勝ち誇ったように見下ろすアイザックに、下等モンスターに敗北した姫騎士の姿を見せつけるだけだ。

「普段、聖騎士と偉ぶっているくせに、鎧に犯されてエロくヨガリおつて。くく、そろそろ始めるか」

アイザックがニヤリと不敵に笑う。

すると、道を遮っていた目の前の岩が、ふいに薄くなつたように感じられた。その瞬間、「——エ、エレナッ!! どうしたのエレナっ!!」

「えっ?! ノ、ノアつつ?! ぶ、無事で……ああつ、声……声……声が聞こえ……つつ」

岩壁の向こうから響くノアの声に、心臓が飛び出んばかりに跳ね上がった。

(さつきまで全然声が届かなかつたのに……。アイザック、これが狙いで……。ダメ、今はダメよっつ!)

ノアの無事が確認できたことへの安心感を、エレナの心に生まれた乙女としての羞恥心が、一瞬にして凍り付かせる。

想い人の声が聞けてうれしい。今すぐにでも会いに行きたい。けれど今は……つ。

そんなエレナの心情を嘲るかのように、腔に突き込まれていた触手の動きが、さらに一層、淫猥で強力なものに変わる。

ドチュドチュツツツ! ジュブウウツツツ!

「んああつつ! あひいつつ! はあはあ、はひつ、ほ……つつ、んふうつつつ!」

膝をついたエレナの背筋がビクンツツ! とわずかに反り返り、両脚がさらに大きくM字に開いてしまう。

今までよりさらに奥、子宮の入り口付近にまで、触手の大きな亀頭が入り込む。しかも



エラの張った巨大な傘で激しく突くだけでなく、まるで膣壁に生えた性感帯のすべてを根こそぎ刈り取るかのように、ズリズリイイッ！ と引き抜いていくのだ。

（オ、オマンコ……触手チンポが気持ちよすぎて、こ……声が抑えられない……つ。こんな状態でノアの声が……ああつ、私の犯されてる声、ノアに聞こえちゃう……つ！）

両手を口に当てようとしても、腕に絡んだ触手の力によつて、妨害されてしまう。

必死に唇を噛み、意識を膣に集中して、快楽をそらそうとしても、まるでそれを予知していたかのごとく、今度は勃起乳首とクリトリスを、それだけで絶頂に達しかねない勢いで、グリグリ、コリコリッ！ と巻き付いた触手に擦りあげられる。

「エレナっ！ よく聞こえないよ。僕は大丈夫。キミはどう？ なんか変な音が聞こえるけど、エレナっ!!」

「わ、私も大丈夫……ふぎいつつ！ ノ、ノア……お願い。今はそこから離れ……んひいいんんっつ！」

恥ずかしさから耳まで真っ赤に染めたエレナの眉が、力ないハの字に悶え下がる。

生まれて初めての膣への挿入快感に、我を忘れて溺れそうになってしまう。

全身から汗が噴き出し、全身を覆う媚薬粘液と混ざり合い、壁の向こうにも臭いような、牝臭いフェロモンを放つてしまう。

アイザックの言葉が、快楽に蕩ける理性に、毒のように染み渡っていく。

女王としてのプライドを剥ぎ取られ、敵の甘言に一匹の牝の本音をさらけ出される。これまで十年以上抑え込んできた、オリヴィアの「女」が解き放たれる。

ジユボジユボツツ！ ズンズンツツ！ ギチギチイイツツ！

「んおほおおおおつつつつ！ チンポ、深いいいいいつつつ！ おおつつ、私の弱いところ、改造されて感じるどころ、全部擦られる……つつ！ おほおおつ！ くおっほおおおつつつ！！」

触手の洗脳淫乱調教によって、脳内に刻まれた牝テクニク……それすらも超越する、まさに発情した熟女の本能に突き動かされ、オリヴィアのダイナマイトボディが、最大の敵の腰の上で、淫らすぎるダンスを踊る。

（き、気持ちイイイイツツ！ カリがすごい。エラが張りすぎて、マン肉の逃げ場がないの……つ。この男に全部見せつけちゃう……つ。私の弱いところ、エッチなところ……みんなみんな、このチンポにバラしちゃうわよおおつつ！）

十年以上に夫を失い、一週間も媚薬で焦らされた性欲旺盛な女王マンコは、オリヴィアの強靱な意志を快楽の淫欲で染め尽くし、飢えた牝の獣へと昇華させる。

ギユポギユポツ！ ズチユズチユウウツツ！！

「どうだオリヴィア。儂のチンポは？ お前の夫……前王のモノと比べてどうなんだ？
ん？」

「そ、そんなこと言えるわけ……っ。ああおうんっ！ はあはああっつ！ くおおうう
っつ、おほっつ、んおおほおおっつ！」

絶対に聞かれたくなかった質問に、オリヴィアの背中がゾクリと震える。

改めてその違いを確認するかのように、勃起ペニスをきつく食い締め、熟れた媚肉と爆
乳を支える上半身ごと、激しく腰を上下させる。

（ほっ、おおおんっ！ そんなの言えるわけないでしょっ！ 言えないわよっ！ 言
つちやダメなのよおっつ！ イ、イクツツ！ またイクツツ！ このチンポにまた……
イカされるううっつ！ んおおおおおっつ！）

オリヴィアの美貌が、眉をハの字に下げ、舌を垂らした悶絶のアクメ顔を晒す。

答えはもうとっくに出ていた。だが言いたくなかった。それを口にしてしまえば、もう
後戻りできなくなると思った。だがそう考えれば考えるほどに……。

ギチュギチュウツツ！ グチュウツツ！

「おおっ、BBAの発情マンコがうれしそうに儂のチンポに絡みついてくるわ。エレナに
負けず劣らずの名器。ミミズ千匹……いや万匹とはこのことだ。ふふふっ、王のチンポも

こんなనికిつく締めてやっていたのか？　なあ、オリヴィア？」

ズチュンツツ！　とアイザックの腰が跳ね上がり、勃起肉棒がオリヴィアの淫肉を突き上げる。……だがあくまで軽く、だ。明らかに遊ばれている行為に、オリヴィアの身体が羞恥とマゾの快感で燃え上がっていく。

「ふぐううつ！　ああ、そんなこと……つ。あの人のチンポじゃ、こんなに気持ちよくな
んて……。んふうつ！　ああつ、それ以上はダメええつつ！　おお、お願いいつ！　オナ
ホールでいるからあつ。あなたのチンポ気持ちよくするから……それ以上は言わせないで
……えつ！」

女王のプライドを捨て、本気で懇願するオリヴィア。

快樂に陥落しかけている身体を支える、最後の心の拠り所を必死で守り抜こうとする。

「くくつ、どこまでも貞操観念の強い女だ。だが女王が嘘はいかな。お前のマンコはと
つくに儂のチンポを気に入っているだろうがっ！　白状しろ、オリヴィアっ！」

バシヤアアツツ！　グチイイツツツ！　ズボズボツツ！　ジュリジュリイイイツツツ！

言ったアイザックは、懐に忍ばせた媚薬の入った瓶をオリヴィアの膣にぶちまける。さ
らに下から両手を伸ばし、オリヴィアの爆乳を絞り上げ、腰を思い切り突き上げて、膣だ
けでなく、フル勃起した陰核を自身の太鼓腹で、思い切り擦りあげた。

その突然にして、あまりの被虐快感に、オリヴィアの最後の理性が沸騰し、蒸発する。

「んんおおおおおおおつつつ！　び、媚薬うううつ！　ギイモヂイイイイイイイツツ！　おおおつ、おつぱいいいいつつ！　クリツツ！　クリイイツツ！　オ、オマンコおほつおおつつつ！！」

（あ……ああ、こ、こんな快楽つてええつ!?　ご、ごめんなさい、あなた。エレナ……つ。お母さん、も……もう嘘つけないのおおつ）

これまでギリギリのところ、その凛々しさを失わなかったオリヴィアの美貌が、完全に快楽に吞まれていく。

十年以上の禁欲の末に叩きつけられた、感度千倍を超える焦らし調教と、驚異的な極太肉棒によって、麗しき女王の牝が暴かれる。

「き、気持ち……イイわよ……つ！　おおおつ！　あなたのデカマラの方が、あの人の貧相なチンポよりも全然イイのおつ！　おおおつ、気持ちイイつ！　マンコギモヂイイツ！！　こんなの初めて……つ。悔しいけど……アイザックのチンポおおつ、死ぬほど気持ちイイのほおおおつ！！」

「ふははつつ、女王といえど所詮は牝であることがわかったかつ！　そおらオリヴィアつつ！　娘と同じように儂のチンポで躡けてやるつつ！　まずは最初の一発つ！　受け取れ、

そして淫らにイケつつ！ 牝豚BBAつつつ！ うおおおおつつつ！

アイザックの肉棒が、オリヴィアのうねる膣の中でブクツ！ と大きく広がる。そして巨大亀頭を子宮口に思い切り叩きつけ、盛大な射精をぶちまける。

ドビュドビュウウウウツツツ！

「おつつつひいおあああああつつつ！ 熱いいいいつつつ！ なんなのこのザーメンの量はあああつつつ!? お、夫の射精とは比べものにならないいいつつつ！ イクツツツ！ イつつちやううつつ！ すごいところまでイカされりゅううつつ!!」

オリヴィアの蕩けきったアへ顔が、グンツと天を向いて跳ね上がり、夫のセックスでは一度も味わったことのないマゾ快感の極致へと突き上げられる。

ブシユウウウツツツ！ ドビュウウウウツツツ！

「んおおつつつ！ おっぱいもでりゅつつつ！ 気持ちよすぎるつつつ！ これがデカマラセックスの快感んんつつつ！ ダメエ、こんなのクセになるつつつ！ 忘れちゃうつつつ！ あの人のセックス、全部アイザックチンポに消されちゃううつつつ！ おへあああつつつ！ おっほおおつつつ！ おおおおつつつ！ イイイッグウウウウツツツ!!」

オリヴィアが、夫との誠実なセックスを出しにされた、屈辱のマゾ快感に打ち震える。勃起乳首から搾り出される、大量の牝白濁が、女王であり、最強の女戦士の証でもある

漆黒のビキニアーマーに、快楽の染みを作る。

「おううつ、ひぐつつ！　こ、腰が止まらないっつ！　おおつつ、気持ちいいッツ！　十年以上ぶりの生チンポセックスっつ！　気持ちよすぎて我慢できないっつ！　んほおおつ、ごめんなさいあなたつ、淫乱なお母さんを許してエレナ……おっほおおおっつ！　まらいッグウウウウウウツツツッ！」

ビクビクウウツツ！　ビュバアアアアツツツ！

艶めかしいなじが、背筋ごとギョウツツと反り返る。

この年齢になって初めて感じる、夫への裏切り中出し快感に、オリヴィアの優しい瞳が、快楽の悦びに悶え泣く。

尖りきった乳首からは、大量の射乳が噴き出し、女王から転落した牝の熟女快感に野太い嬌声を発してしまふ。

「イクツツツ！　おふおおおおつつ！　イクの止まらないっつ！　おおおつつつ、アイザックザーメンすごいっつ！　頭がバカになるくらいギモヂイイッツツ！　んおおおおおつつつ！　女王なのがいいっ、イギまぐるうううつつつ！」

焦らされ、十数年ぶりに完全に火が点いたオリヴィアの牝欲の声が、淫靡な牢獄にこだまする。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義の乙女が犯され、敗北絶頂をキメるアンソロジー!!

【偶数月】
隔月発売
2・4・6・8・10・12月

【奇数月】
隔月発売
1・3・5・7・9・11月

【電子版】
毎月配信
着刊前15日発売



ニ次元
ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE

コミック **UNREAL**
オムニバス

敗北乙女
エクスタシー



あなたのキモチイをお手伝い!キルタイムのアダルトコミック誌
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も
好評発売中!

二次元ドリームノベルズ

日常に密着したエロス、リアルな舞台設定で送る官能小説レーベル!



小説家になるこの男性向けサイト「アクトアインノベルズ」から書籍化!

戦うヒロインを屈服させちゃうかなり過激な陵辱系ライトノベル!



リアルドリーム文庫

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ



あなたはどのタイプ?

あとみっく文庫

呪詛喰らい師 (Sorcerer Who Eats Curses)

あの人気作品の外伝作品もあり! 電子書籍でしか読めないオリジナル



二次元ぷち文庫

二次元ドリーム文庫